

II 遺 構

1 遺 跡 の 概 観

土層 調査地の基本的な層序は現水田耕土・床土下に灰色砂層と茶褐色砂質土がある。砂層が明瞭なのは1次、2次、3次東の発掘区であり、調査地の北方では40～50cmの堆積を示す。北方に位置する菰川の氾濫によるものであろうが、砂だけの堆積は少なく粘質土も混じえており、数度にわたる氾濫によるものである。3次西の発掘区では砂層がなく、床土が厚く堆積する。砂質土及び床土の下には、灰色粘質土が約30cmの厚さで堆積する。この層には遺物が少ないが、中世末から近世の水田床土と考えられる。灰色粘質土の下には遺物包含層である暗灰色粘質土層があり、その下に茶褐色地山がある。暗灰色粘質土層は奈良・平安時代の遺物を多く含むが、中世の土器も若干混じえている。中世の土壇群は、暗灰色粘質土層の上面から掘りこむものが多いが、下層から掘りこむものも若干ある。奈良・平安時代の掘立柱建物、溝はいずれも茶褐色地山面で検出した。茶褐色地山面である遺構検出面は、4つの発掘区とも現地表下1.4～1.6mである。標高でみれば、おおむね60m±10cm以内におさまる。

古代の遺構 遺構は左京二条二坊十三坪内に形成されたもので、奈良時代の初期から平安時代の中期におよぶ期間に属し、A・B・C・D・E・Fの6期に区別できる。A～E期の基本的な建物配置は、主屋と副屋を1棟ずつ配する点にある。A～C期では二条大路よりに建物が配され、D～E期では二坊大路よりに建物を配する。

左京二条二坊十三坪の南北・東西幅 本調査で検出したS F 2760の心は、平城宮朱雀門心から国土方眼方位で東へ931.020mの地点にある。この距離を条坊計画による1坊幅(1,800尺)+3坪幅(1,350尺)=3,150尺で割ると、1尺29.56cmの値がでる。この数値を基準にして、東二坊坊間路をみると、123-26次の西側溝東肩より2m東が条坊計画線となる。これは宮に接する坊間路を幅広くとり、他を狭くとったためで矛盾はない。次に東二坊大路は左京三条二坊十五坪の調査で西側溝を検出しており、その後の調査成果はない。従って報文のとおり、左京二条二坊十三坪も三条二坊十五坪と同じく、東西幅は坪の計画幅(450尺)-小路 $\frac{1}{2}$ 幅(10尺)-大路 $\frac{1}{2}$ 幅(30尺)=410尺としておく。次に二条大路であるが、宮東南隅の32次の調査では溝心々38mであり、左京二条二坊十二坪における奈良市の調査では溝心々32mとなり、宮に接する二条大路の南側溝にくらべ、二条大路の南側溝が6m北へ位置することになる。この位置での二条大路心と、左京三条二坊十五坪での坪境小路心との距離は135mとなり、450尺で割ると1尺=30.0cmの値がでる。従って溝を含まず、路面幅だけをとると、南北幅は坪の計画幅(450尺)-二条大路 $\frac{1}{2}$ 幅(50尺)-小路 $\frac{1}{2}$ 幅(10尺)=390尺となる。

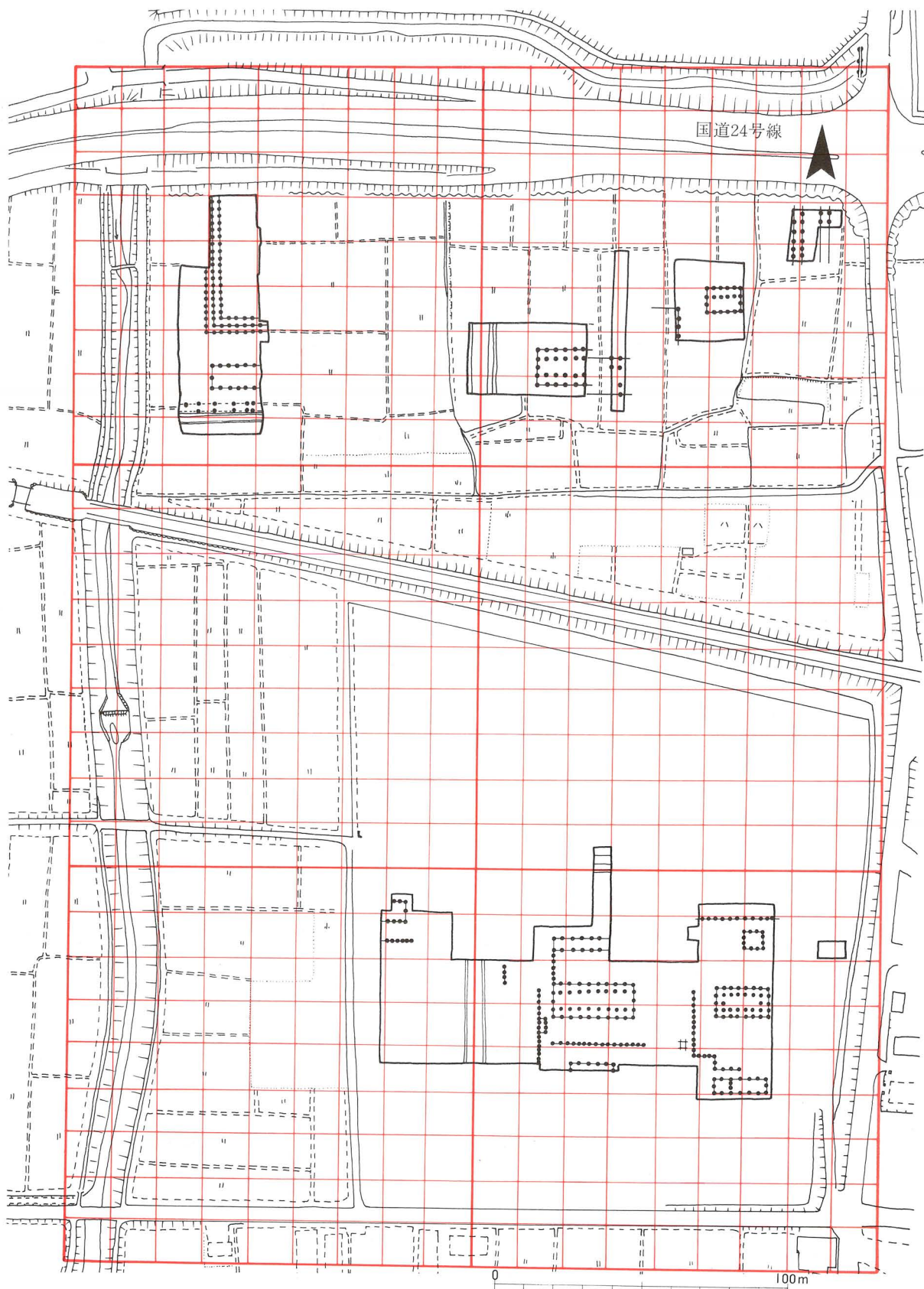


fig. 3 左京二条二坊十二・十三坪及び三条二坊十五坪の遺構図と50尺方眼

時 期	建 物	棟 方 向	規 模 ・ 廂	桁行m(尺)	梁行m(尺)	廂 m (尺)	備 考
A	S B 2700	E・W	5 α ×4 N・S	14.8(50) α	11.9(40)	3.0(10)	
	S B 2650	E・W	3 α × α N		9.7(33) α	3.6(12)	
	S A 2273	E・W	2 α	4.8(16)			
B	S B 2363	E・W	4 α ×4 N・S	11.9(40) α	11.8(40)	3.0(10)	
	S B 2710	N・S	6 α ×2 α E	17.7(60) α	5.9(20) α	3.0(10)	
	S B 2660	E・W	3 α ×3 S		8.4(27) α	2.1(7)	
	S B 2620	E・W	2 α ×3 S		3.5(12) α	2.1(7)	
	S B 2366	E・W	1 α ×2		2.1(7) α	4.8(16)	
	S A 2367	E・W	1 α		2.4(8) α		
C	S B 2630	E・W	4×2	10.7(36)	4.7(16)	間仕切り	
	S A 2634	N・S	3	6.3(21)			
	S B 2645	N・S	α ×2		5.4(18)		
	S B 2621	N・S	α ×2		4.5(15)		
	S B 2364	E・W	2 α ×2	3.0(10)			
	S B 2263	E・W	1 α × α	2.7(9) α	3.0(10) α		

tab. 2 A～C期建物・堀一覧表

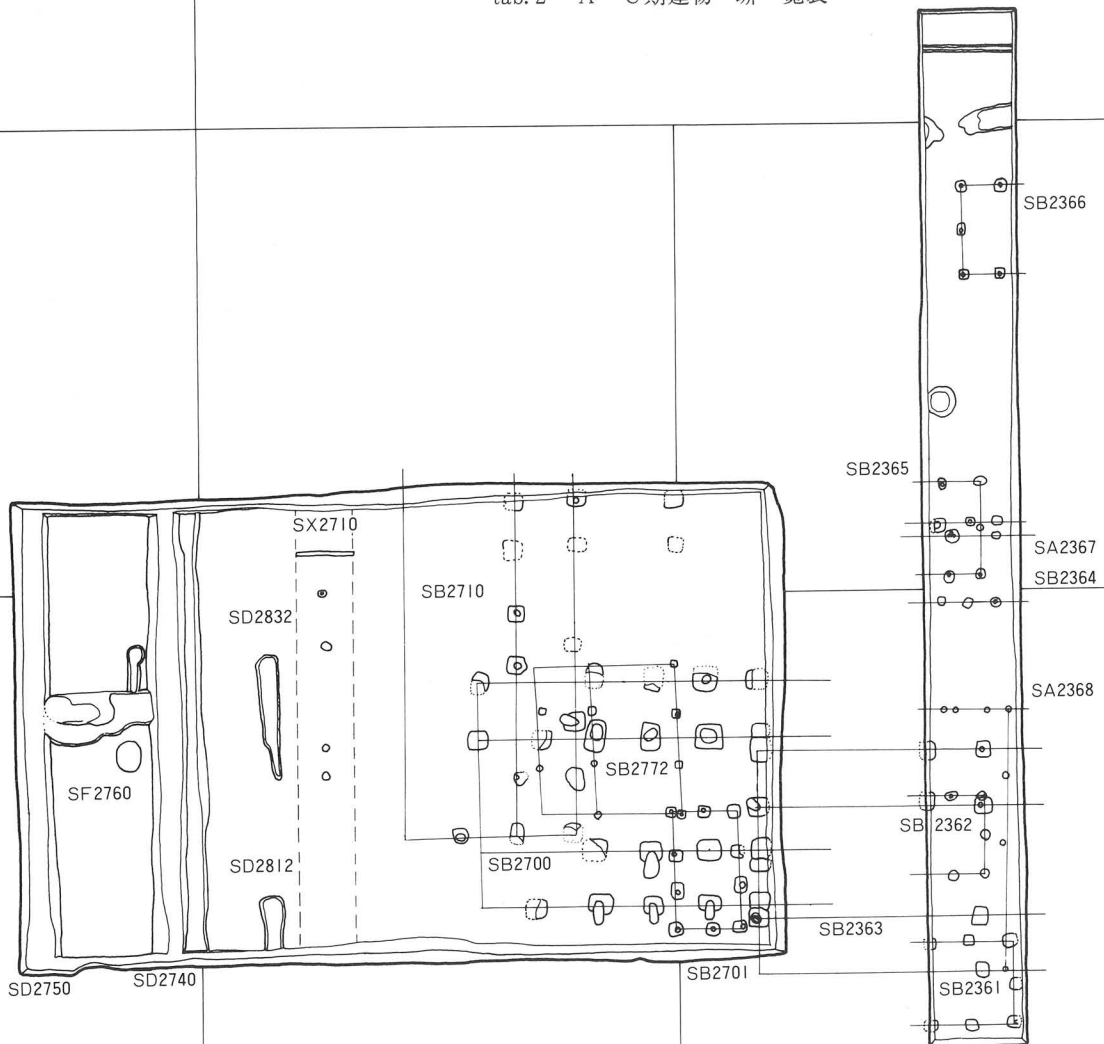
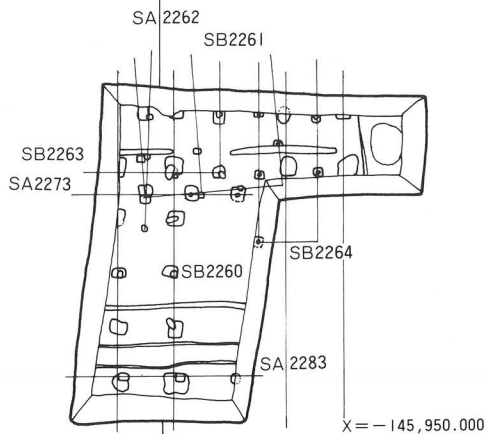
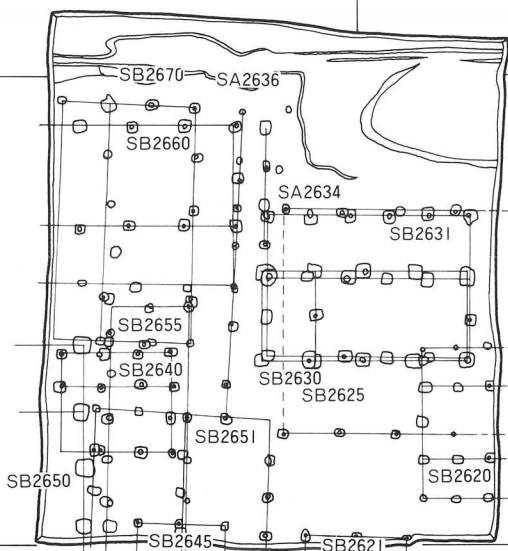


fig. 4 左京二条二坊十三坪の発掘遺構図



X = -145,950.000

X = -145,975.000

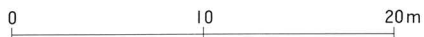
時 期	建 物	棟 方 向	規 模 ・ 廂	桁行m(尺)	梁行m(尺)	廂 m(尺)	備 考
D	S B 2263	N・S	5α×4 E・W	14.7(50)α	11.9(40)	2.9(10)	
	S B 2631	E・W	5×3 N	10.5(35)	7.4(25)	3.2(11)	
E	S B 2625	E・W	3α×4 N・S	8.9(30)α	11.9(40)		間仕切り
	S B 2670	N・S	5×3 W	12.6(39)	6.8(23)	2.6(9)	
	S B 2365	E・W	1α×2	1.8(6)α	4.9(16)		
	S B 2362	E・W	1α×2	1.8(6)α	4.2(14)		
	S B 2701	N・S	3×2	6.3(21)	3.6(16)		
	S B 2264	N・S	2α×1	6.5(22)		3.0(10)	
	S A 2283	E・W	2α	6.1(20)			
F	S B 2261	N・S	2α×3 W	4.8(16)α	7.2(24)	3.0(10)	
	S A 2262	N・S	3α	6.1(21)α			
	S B 2651	N・S	3α×4	5.6(19)α	9.0(30)		
	S A 2636	N・S	6	16.5(56)			
	S B 2640	E・W	3×3 N	5.7(19)	5.4(18)	1.8(6)	
	S B 2655	N・S	5α×2	10.5(35)	4.0(14)		
	S A 2368	N・W-N・S	E・W-3α N・S-4	E・W-3.4	N・S-13.8		
	S B 2361	E・W	2α×2	4.3(14)	4.3(14)		
	S B 2772	N・S	3×3 W	8.1(27)	4.5	2.5~2.7	

tab. 3 D～F期建物・堀一覧表

X = -146,000.000

Y = -17,575.000

Y = -17,550.000



2 第 1 次 の 調 査

検出した主な遺構は、掘立柱建物 5 棟、掘立柱塀 3 条、素掘溝 4 条、土壇 4 基である。

A 期 塀 S A 2273、溝 S D 2265、S D 2266・2282、土壇 S K 2270がこの期に属する。S D 2282は幅 1.2 m、深さ 15cm の素掘溝で、十三坪を南北に 2 分する。S D 2265・2266は深さ 6 cm の浅い溝で、一条の東西溝の底だけが残ったものである。この溝と S A 2273とは、十三坪北半の宅地の南限を画する施設であろう。S K 2270は断面が摺鉢状の土壇で、多量の土器や瓦と共に鞆羽口が出土した。北隣の十四坪東辺の調査(89次)でも同時期の土壇が南北に連なって検出されている。

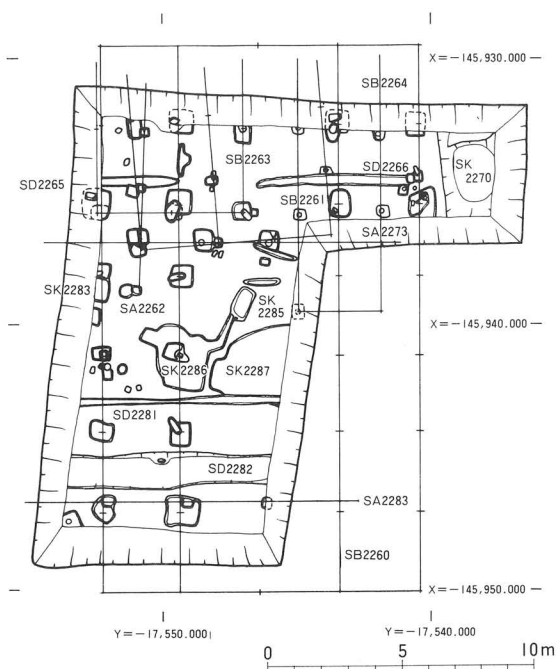


fig. 5 第 1 次調査遺構図

B 期 S D 2282は存続する。A 期・B 期ともにこの地域には建物遺構はない。

C 期 十三坪の南北を 2 分する機能は、幅 30cm、深さ 10cm の素掘溝 S D 2281に受け継がれる。S B 2263は坪北半部に属する掘立柱建物で、柱間は東西方向 9 尺、南北方向 10 尺である。S K 2286・2287は不整形の浅い土壇で、土器と共に鞆羽口、るつぽ、漆付着土器が出土した。埋土中には炭化物、炉壁と思われる焼土塊が多量に入っていた。この他にも、S K 2287周辺には炭化物の詰った小穴や溝状遺構があり、溝状遺構からは焼けた栗石が出土した。近くに金属関係工房の存在が推定されよう。A 期～C 期は坪が南北に 2 分して使用されており、南北分割線上に位置する本調査区には、東西方向の溝、塀以外には主要な建物遺構は存在しない。

D 期 南北棟二面廂付掘立柱建物 S B 2260が建つ時期。S B 2260は桁行 5 間分を検出し、梁行 4 間、柱間 10 尺等間である。D 期建物群の主屋に相当する建物である。

E 期 S B 2264、S A 2283がこの期に属する。S B 2264は南北棟掘立柱建物になると考えられる。桁行の柱間が 10～11 尺と不揃いで、柱痕跡も小形である。

F 期 S B 2261は西廂の付く南北棟掘立柱建物で、柱間は桁行 8 尺、梁行 7 尺、廂の出 10 尺である。方位が北で 07° 西へ振れており、柱もやや不揃いである。S B 2261廃絶後、柱間 6 尺～7 尺の南北柵 S A 2262が建てられる。

3 第2次の調査

幅5m、長さ55mの南北に長い発掘区を設定して、掘立柱建物6棟、掘立柱塀2条、溝1条、井戸1基、土坑11基を検出した。

A期 S D 2370は幅0.6mの素掘りの東西溝。1次調査でも東側延長部を検出している。十三坪を南北に二分する位置にある。S E 2371は深さ1.6mの井戸で、径1.5mの整った円形掘形をもつ。井戸枠は抜かれている。埋土中から平城IIの土器(fig.13-89)が出土した。S E 2371は3次調査S B 2650の北側柱列延長線上にある。

B期 大形の掘立柱建物S B 2363に代表される時期で、塀S A 2367、建物S B 2366が共存し、A期のS D 2370も存続する。S B 2363は南北二面廂付建物。身舎の梁間20尺、桁行柱間および廂の出は10尺である。一辺1m近い方形の柱掘形を6箇所検出した。該期の十三坪内における中心的建物と考えられる。S A 2367はこの建物から40尺離れて設けられた目隠塀で、西側の柱穴には柱根が残り、周囲を拳大の礫で固めた工作がみられる。S B 2366は東西棟建物の西妻部分。一辺0.6m前後の方形掘形の中に径20cmの柱根が残る。この建物の北側柱列は大形建物S B 2363の北廂から100尺の位置にある。

C期 B期の建物は存続するが、東西塀を廃して掘立柱建物S B 2364が建てられる。S B 2364は5尺等間の南北両側柱列を検出した。梁間は15尺を測るところから梁行3間の東西棟建物となろう。

E期 大形建物S B 2363は既に廃絶され、同位置に桁行2間以上、梁行2間の東西棟建物S B 2362が建ち、S B 2362の北40尺には東妻の柱筋を揃えてS B 2365が建つ。ともに桁行が6尺、梁行はS B 2362が7尺、S B 2365が8尺等間である。S B 2362の柱穴埋土中からは緑釉片が出土。北端には3基の土坑がある。S K 2382は3次調査で検出したS D 2699の西側延長線上にある。埋土中に木炭層の堆積があり、S K 2379出土破片と接合する緑釉杯(fig.13-100)を出土しており、灰釉耳皿を出土したS K 2376とともに一連の遺構である。

F期 S A 2368は12尺等間の逆L字形の塀。柱の掘形は小さく、南北列は北で東に振れる。調査区南端で検出した7尺等間の東西棟建物S B 2361もその位置から二条大路に面する築地が廃絶してからの建物と考えられる。北で西に振れる。

G期 調査区北半で検出した8基の土坑は、土採りのために掘られた穴で、S K 2377出土土器から13世紀末頃に位置付けられる。

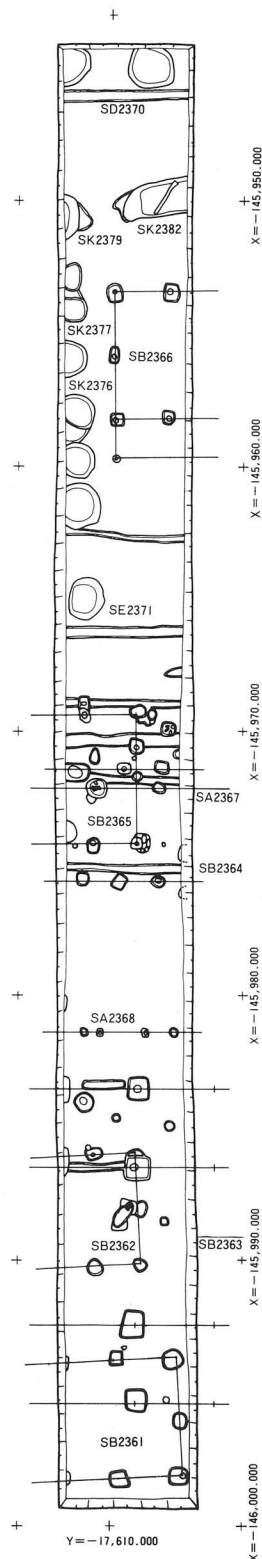


fig. 6 第2次調査遺構図

4 第3次東の調査

発掘区の土層は、上から耕作土(約20cm厚)、床土(黄褐色土・黄褐色土バラス混り、25～30cm厚)、堆積層(灰茶褐色土・灰色粘土、55～60cm厚)、遺物包含層(約20cm厚)の各層が約130cmの厚さに堆積し、遺物包含層直下の地山面上(黄褐色粘土)に遺構を検出した。検出した主な遺構は、建物12棟、塀2条、溝1条、土壇などがあり、遺構の重複状況や位置関係からA～F期の6期に区分できる。

A期 S B 2650を発掘区西南隅に南北3間分の側柱列として検出した。柱間寸法は北端間12尺、他柱間10尺である。この柱列は東西棟または南北棟建物の東側柱の北3間分にあたり、柱間寸法のとり方からみて、東西棟の北廂付または、南北2面廂付建物の可能性が高い。桁行柱間寸法は分らないが梁行と同じ10尺等間とすると、発掘区西方の2次発掘区までは延びていないので、東西5間と推定される。

B期 S B 2620・2660の2棟がある。S B 2620は発掘区東南隅に検出された東西3間以上、南北4間の東西棟三面廂付建物である。柱間寸法は桁行5.8尺等間、梁行6.5尺2間、南・北面廂の出7尺、西面廂の出7.5尺である。西・北面廂は、遺構面の削平が大きく、柱痕跡のみを残し、柱掘形は消失したと思われる。なお、東方未発掘区において、この建物の東面にも廂が付けば四面廂となる。S B 2660は発掘区西北部に検出した桁行3間以上、梁行3間の東西棟南廂付建物である。柱間寸法は身舎9尺等間、廂の出10.5尺である。

C期 建物3棟S B 2621・2630・2645と塀1条S A 2634がある。S B 2621とS B 2645は発掘区南端に北側柱のみを検出した南北棟建物で、柱間寸法はS B 2621が9尺2間、S B 2645では東柱間8尺、西柱間7尺である。S B 2630は発掘区の中央東寄りに検出した桁行4間、梁行2間の東西棟建物である。S B 2631の身舎とほぼ同規模・同位置に重複しS B 2630の方が古い。S B 2630の西妻中央柱はなく、1間東寄りに間仕切りの柱を立てているので、西妻2間分を開放して間仕切り位置に出入口を設けたものと考えられる。柱間寸法は桁行9尺、梁行8尺。柱穴から平城Ⅲ・Ⅳ期の土師塀、須恵坏蓋が出土。S B 2634はS B 2630の西妻側柱に取り付いて北に延びる柱間3間、7尺等間の塀である。

D期 S B 2631は桁行5間、梁行3間の東西棟北廂付建物で、柱間寸法は身舎7尺等間、廂の出11尺である。S B 2630とは身舎部分が同位置で、連続して建替えたものと考えられる。柱穴からは平城Ⅴ期の土師皿出土。

E期 S B 2625・2670、S K 2690、S K 2680がこの期に属する。S B 2625はD期のS B 2631と重複し、S B 2625の方が新しい。S B 2625の残存遺構は南北の廂側柱のみで、身舎部分は礎石または土台建てのため痕跡を残さないものと考えられる。廂は掘立柱で桁行3間以上、柱間寸法10尺等間で、南北側柱間の間隔は40尺であるから、身舎・廂の出とも10尺等間の東西棟建物と推定される。S B 2670はS B 2625の西に約5m離れて建つ桁行5間、梁行3間の南北棟建物で、柱間寸法は桁行北2間9尺、南3間8尺、身舎梁行7尺、廂の

出 9 尺である。廂柱は
両端のみ残存し、中間
部は後世の土壇により
攪乱を受けている。身
舎内部には北 2 間と南
3 間を区画する間仕切
柱がある。柱穴からは
9 世紀中～後半頃の緑
釉陶器が出土。S D 26
99 は発掘区北端で検出
した東西溝でその終末
期には土壇 S K 2690 と
一体となって廃絶して
いる。溝幅 50～70cm、
深さ 20cm 程で、西から
東に流れる。溝の南側
溝が南に拡がって大土
壇 S K 2680 を形成して
いる。S K 2690 及び S
D 2699 からは 9 世紀中
～後半頃の灰釉陶器が出土。

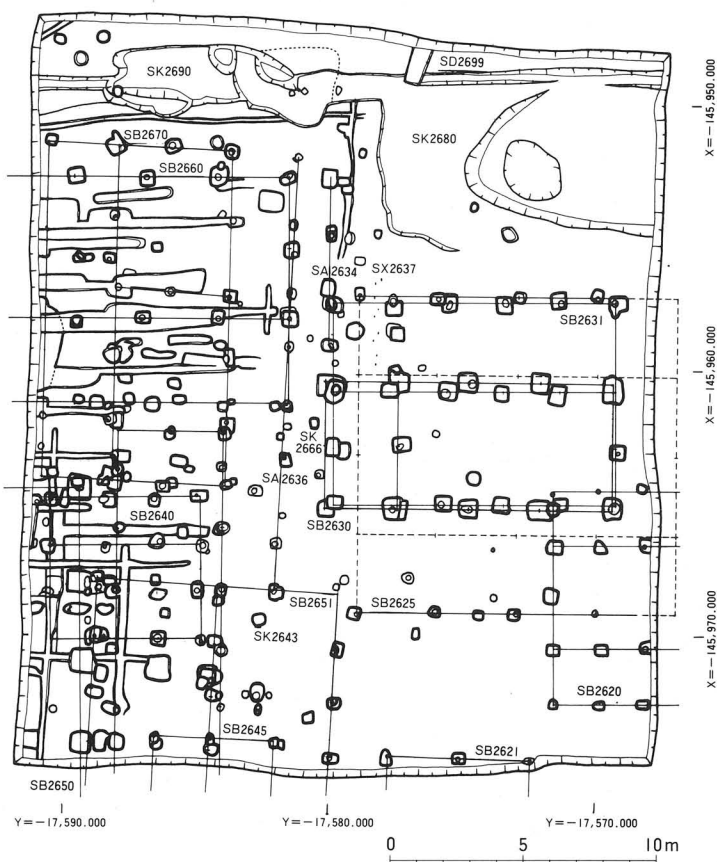


fig. 7 第 3 次東調査遺構図

F 期 建物 S B 2640・2651・2655 と 塀 S A 2636 の時期である。3 棟の建物は発掘区西南部で重複してさらに 3 小期に区分される。柱穴の重複では、S B 2651 よりも S B 2655 が新しく、S B 2640 との前後関係は不明であるが、出土土器形式からは S B 2640 が最も新しいものと考えられる。S B 2651 (F₁ 期) は桁行 3 間以上、梁行 4 間の南北棟建物で、棟通りに柱が立ち、梁行を東西に 2 等分する珍しい平面形式をもつ。柱間寸法は桁行 7 尺、梁行 7.5 尺である。北側柱の東端から 1 間目に塀 S A 2636 が取り付く。S A 2636 は柱間 7 間の南北塀で、柱間寸法は S B 2651 との取付部柱間から北に 6・11・7・7・7・8.5・8.5 尺である。この塀と S B 2651 は北で東に大きく振れている。塀の東 11 尺に並行する板杭列 S X 2637 も同じ振れをもつことから同時期であろう。S B 2655 (F₂ 期) は桁行 6 間以上、梁行 2 間の南北棟建物で、柱間寸法は桁行北端間 4.5 尺、他柱間 7.5 尺、梁行 6.5 尺である。柱穴から黒色土器 A (杯) が出土。S B 2640 (F₃ 期) は桁行 3 間、梁行 3 間の南北棟東廂付建物。柱間寸法は桁行 6 尺、身舎 6.5 尺、廂の出 5 尺で、身舎内部に床東がある。柱穴からは 10 世紀前半～中頃の土師皿が出土。

5 第3次西の調査

検出した主な遺構は掘立柱建物5棟、溝5条、木樋1条、道路1条、土壇3がある。鎌倉以降の土壇が131基あるが、この土壇群の個々については記述を省略する。

A期 建物S B2700、坪境小路S F2760、東側溝S D2740、西側溝S D2750、土壇S K2800がある。S B2700は発掘区東で検出した南北二面廂付東西棟建物で、桁行5間以上、梁行4間で、柱間寸法は身舎、廂の出とも10尺等間である。柱掘形は身舎で1.3×1.1m、深さ0.4～0.6m、廂では方1m前後、深さ0.5～0.6m。身舎南側柱列、南廂柱列では柱抜取痕跡が南に延びる。西側の妻中央柱は土壇S K2764によって破壊され、検出していない。S D2740は南北方向の溝で、S F2760の東側溝。幅3m。深さは西幅2m部分が70cmと深く、東幅1m部分は20cmと浅い。溝内には暗青灰粘質土が堆積し、少量の遺物を含む。S D2750は南北方向の溝で、S F2760の西側溝。幅2m以上で、西肩は未検出。深さ60cm。溝内には暗青灰粘質土が堆積。S F2760は十二・十三坪境小路で、南北方向の道路。路面幅4.8～5.2m。路面舗装の痕跡はなく、地山面で検出。なお、S D2740とS D2750との心距離は7.5～8m。S D2875は、東西両側溝を横に連結する東西方向の溝。幅1.5～2m、深さ20cm。東西両側溝の水量を調節する溝と考えられる。S K2800はS F2760上にある土壇。埋土中から多量の土器(平城Ⅱ期)が出土。

B期 建物2棟S B2363・2710、木樋S X2720、土壇S K2870・2801がある。S B2363は発掘区東南隅に南北3間分の側柱列として検出したもの。この柱列は、2次調査で検出した東西棟建物の西側柱列にあたり、柱間寸法は身舎・北廂とも10尺等間である。2次調査検出の柱穴と併せると、南北二面廂付東西棟建物で、桁行4間以上、梁行4間となる。北側柱の北端から3番目の柱穴で平城Ⅱ・Ⅲ期の須恵器杯・蓋が出土。北端から4番目の柱穴には、板を5枚重ねた礎板があった。S B2710は発掘区中央に東廂側柱列、身舎東側柱列として検出した南北棟建物で、身舎西側柱列は後世の土壇により攪乱をうけ、消失している。身舎南妻中央柱は検出。身舎東側柱列は南端から3番目を除く6箇所で柱穴を検出し、桁行6間以上となる。東廂側柱列では南端から1～3番目のみ検出し、以北は後世の土壇により消失。柱間寸法は身舎・東廂とも10尺等間である。S X2720は、1枚の底板と南北両側辺に各1枚の側板を置く施設であり、木樋。底板は長さ3m、幅30cm、厚さ1.5cm。側板は高さ4cm。木樋掘形は、幅40cm、深さ15cmで、地山面に掘り込む。木樋S X2720を据える地山面上は、S D2832・2812溝上端地山面より約20cm高く、一段高い地山面が南北に連なる。築地土をとどめないが、S D2832・2812は築地の西側溝、S X2851・2845・2829・2827が築地寄柱の痕跡である可能性がある。S K2870は深さ7～14cmの浅い土壇で、埋土に焼土を含む。埋土中より平城Ⅱ・Ⅲ期の須恵器杯蓋が出土。漆絵漆器はS K2870上端とその上層にある包含層(灰色粘質土)との境目より出土。S K2801は深さ60cmの土壇で、S D2875上にあり、S D2875より新しい。少量の土器が出土。

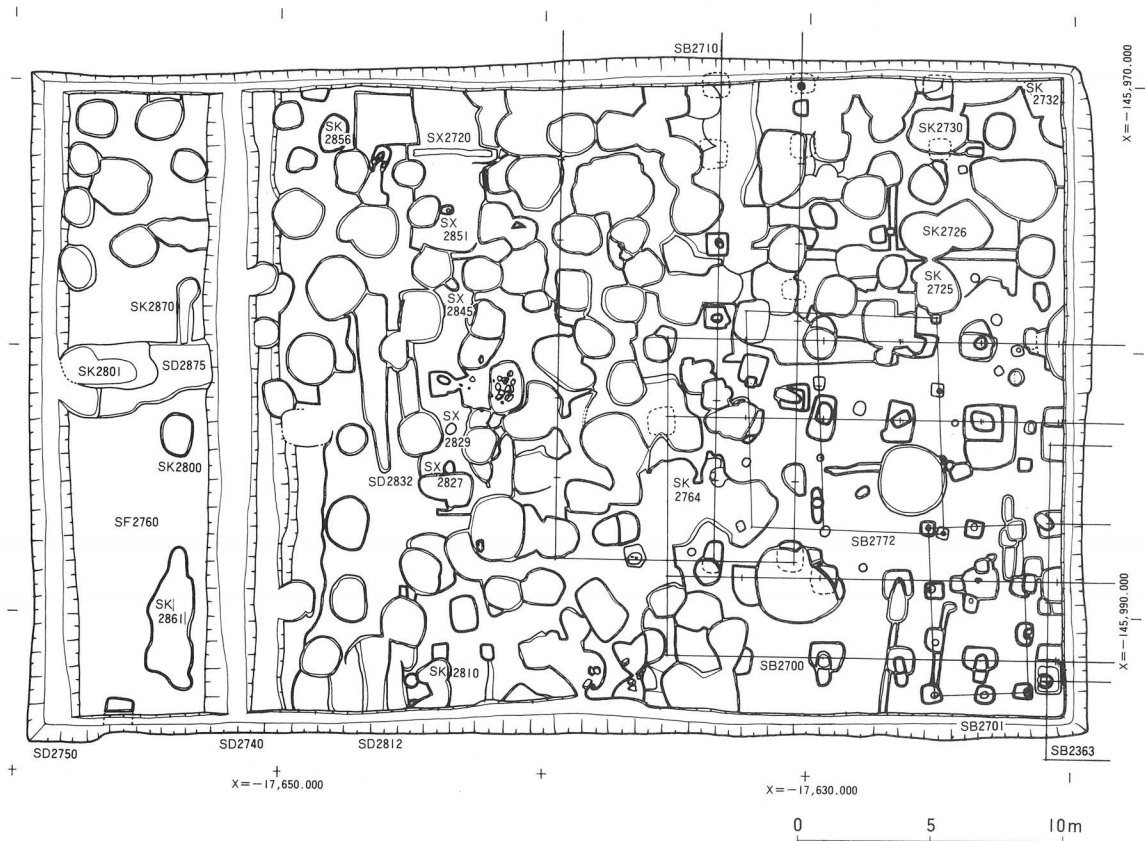


fig. 8 第3次西調査遺構図

C期 S B 2790は発掘区中央北半に南北3間分の2列の柱穴として検出した。柱間寸法は8.3尺(2.5m)等間。西側の柱列は、北端の柱に柱根が残り、北端から1間目、3間目に柱穴を検出。東側の柱列は北端と北端から1間目に柱穴を検出。西側と東側との柱列の寸法は16.6尺(5m)。柱間寸法のとり方からみて、東西棟の北廂付建物または2間×3間以上の南北棟建物が考えられる。西側及び東側の柱列とも後世の土壇によって多くが破壊されており、南北・東西両棟いずれとも決め難い。

E期 S B 2701がある。S B 2701は桁行3間、梁行2間の南北棟建物で、柱間寸法は桁行7尺、梁行6尺である。柱掘形は方50~70cm前後で、掘形埋土から灰釉陶器が出土。

F期 S B 2772がある。S B 2772は桁行3間、梁行3間の南北棟西廂付建物で、柱間寸法は身舎桁行9尺、梁行7.7尺、廂の出9尺である。南北妻中央柱は未検出。柱掘形は方40cm前後で、一部に径15cmの柱根が残る。

G期 発掘区全域にわたって多くの土壇が掘られ、奈良~平安時代の遺構が破壊された時期。131基の土壇がある。鎌倉以降の瓦器・土師器がS K 2725・2726・2730・2732・2764・2856・2861から出土している。